

TOEIC の賢い利用法

安井 稔
Yasui Minoru

1 花盛りの TOEIC

このところ、どちらを向いても、TOEIC である。大手銀行は、行員に、TOEIC 800 点を求めている。大手企業は、軒並み、採用や昇進に、TOEIC をからめている。文部科学省も 2002 年に出した『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想において、英語教員は TOEIC 730 点ぐらいは必要としている。全国の大学の 4 割で、TOEIC 600 点以上あれば 4 単位を与えているといわれる。ここで先回りをして、一言、述べおくとするなら、これらはいずれも、愚挙の極みである。

2 TOEIC とは何か

TOEIC という頭文字語をもとにもどすと、Test of English for International Communication となる。これは、通例、「国際コミュニケーション英語能力テスト」と訳される。国際間のコミュニケーションにおいて、重要な役割を担っている道具としての英語の能力テストと考えてよいであろう。この看板自体

に、問題は、全くない。問題があるのは、その成り立ち、運営、テストの中身などであろう。

その成り立ちからみてゆくと、TOEIC は一般の予想とは異なり、アメリカ発生のテストではない。1970 年代、日本人有志の発案により、アメリカの NPO である Educational Testing Service (ETS) が立案・作成したものである。この ETS のホームページをのぞくと、TOEIC が Listening and Reading Test と Speaking and Writing Tests の 2 種類に分けられている。

一方、日本で TOEIC を請け負って実施している組織は、(財)国際ビジネスコミュニケーション協会であり、日本における TOEIC の公式ホームページもこの組織が運営している。そのホームページをみると、まず TOEIC Test と TOEIC SW (= Speaking and Writing) Tests の 2 種類が記されているが、説明を読むと、前者が ETS のいうところの Listening and Reading Test であることが明らかである。

情報誌『選択』の 2011 年 4 月号に「日本人の愚かな『TOEIC 信仰』」という記事が掲載されていた。それによると、毎年、約 16 億円のライセンスフィーを国際ビジネスコミュニケーション協会は ETS に支払っているという。ついでに記すと、日本における受験料の総額は、年間 60 億円という。国際ビジネスコミュニケーション協会の関連会社が小さな脱税事件も引き起こしているが、真に問題とすべきは、いうまでもなく、看板どおりのテストが行われているか、という点である。

日本では、一般に、TOEIC は、英語の力を直接、テストし、高得点を取れば、それは、そのまま、高い英語力が身につけていることを示すと考えられている。これは、そもそも、正しいのであろうか。

3 TOEIC と英語力について

英語力がしっかり身につけている人が、TOEIC を受ければ、高い得点を上げることができるが、その逆は真でない。すなわち、TOEIC で高得点を上げると、その人は高い英語力が身につけているといえるかということ、そうとは限らないのである。

どうしてかということ、前述したように、日本でいう TOEIC Test は TOEIC Listening and Reading Tests であり、英語力の一部を対象としているだけで、英語力の全般を対象としてはいないからである。英語の学習は、古くから、4 技能の達成を目標としてきた。話すこと (Speaking)、書くこと (Writing)、読むこと (Reading)、聴くこと (Listening) の 4 つである。これらのうち、日本でいう TOEIC Test の対象となるのは、最後の 2 つ (Reading と Listening) で、最初の 2 つ (Speaking と Writing) については、2006 年から、また別に試験が設けられているのである。

したがって、TOEIC Test で高得点を取りながら、英語を満足に話すことも、書くこともできないという人は、掃いて捨てるほどいると思われる。これは、Listening と Reading しか試されていないわけであるから、当然、予測される結果であって、テスト自体の責任ではないが、そういつて、事が丸く治まるわけのものでもない。

ここで泣いてもらわなければならないのは、TOEIC という看板に含まれている EIC (= English for International Communication)、つまり国際コミュニケーションのための英語という部分である。4 技能のうち、発表にかかわる 2 つの技能、すなわち、文を構成し、作り上げる能力と、それを口に出して発音し、相手に伝える能力に関しては、繰り返しになる

が、別にテストが設けられているのである。他の 2 つの、いわば理解に関する技能、すなわち、「読んで分かる」、「聞いて分かる」という技能が身につけてさえいれば、国際コミュニケーションは万全である、というのであろうか。だれが考えたって、そういうことはないであろう。せいぜいのところ、一方通行どまりである。

ところが、国際ビジネスコミュニケーション協会は、ホームページ上で、「Listening と Reading という受動的な能力を客観的に測定することにより、Speaking と Writing という能動的な能力までも含めた英語によるコミュニケーション能力を総合的に評価できるように設計されてい(る)」と主張しているのであるから、驚く。

4 TOEIC をどうする

日本でいう TOEIC Test が実は英語能力の半分しか測定しないと分かっていても、我々はどうすることもできない。日本における TOEIC の将来は TOEIC の当事者たちが考えればよい。我々が考えなければならないのは、日本の英語教育自体の今後である。ここでも、現状認識から始めることにする。なお、次節は、ふたたび、情報誌『選択』による。

まず、TOEIC の受験生は 65 パーセントが日本人、12 パーセントが韓国人、つまり、受験生の 8 割近くが日本人と韓国人で占められていることになる。TOEIC の得点は全世界に通用するグローバルスタンダードであると考えている向きが多いと思われるが、それは虚妄である。一步、日本の外にできれば、TOEIC など、ほとんどだれも知らないというほうが真に近いといつてよい。読む力と聞く力だけで英語の総合能力をはかる

ことはできないのであるから、隆盛を誇る TOEIC 信仰は、正に、「亡国の英語検定」(『選択』)と呼ばれても、致し方のないところであろう。

ここで、TOEIC がかくも隆盛を極めるに至ったのはどうしてであるか、少し考えてみることにしよう。『選択』の指摘によれば、数字によってその人の英語能力の優劣が分かるかのようなスコアの設定、および、それを導き出すための統計を処理する技術を、まず、挙げるべきであろう。「ほぼ毎月実施という気軽さ」、「個人受験なら 5,000 円台という割安感」、「コンビニにでも申し込める利便性」等々の因子も、176 万人といわれている受験者数 (2010 年度) を支えていると思われる。

TOEIC が日本人に人気があるということの裏に、もう 1 つ、大きな隠れた理由があるように思われる。それは TOEIC 自体の責任ではない。責任ということであるなら、日本の英語教育界全体の責任ということになるであろう。それを一言でいうなら、日本人英語学習者が、おしなべて、「英語で話すこと」(Speaking) と「英語で書くこと」(Writing) の 2 つはどちらも苦手であるという事実に関係している。

それのよってきたるところを求めてゆくと、歴史的にも、文化論的にも、際限なく広まってゆくであろう。ここでは、そういう事実があることを確認すれば足りる。要するに、苦手意識のある科目を外してあるテストには、黙っていても人々は群がるのである。もしも、TOEIC Test に SW Tests を組み込むといった大変更を加え、「Speaking と Writing を最重要科目とする」としたら、興味深い結果が得られること、請け合いである(ちなみに、日本における TOEIC SW Tests の受験者数は、上記財団の公式資料によると、2010 年度で 8,500 人であり、

TOEIC Test 受験者数の 0.48 パーセントである)。

日本でいう TOEIC Test の高得点が、必ずしも、高い英語力を意味しないという事実は、しだいに人々の知るところとなってきつつあるようである。それかあらぬか、韓国においても、中国においても、TOEIC に代わる新しいテストを模索する動きがすでに始まっているようである。韓国では国家による英語コミュニケーション能力の検定に乗りだし、国立ソウル大学、韓国商工会議所が後押しをしているという。中国はケンブリッジ英語検定の協力を仰いで、英語検定の実を挙げていると聞く。

5 コミュニケーションについて

日本における TOEIC Test が現状のままであると、看板のコミュニケーションという語が泣く、と上で述べた。ここで、コミュニケーションということについて、一言、述べておくべきであろう。

コミュニケーションというのは、話し手と聞き手とが情報を伝え合い、感情を分かち合うことをいう。通例、主役は言語である。その基本的な単位は文である。文は、単語と文法とが与えられれば、際限なく、作りだすことができるけれども、文さえ与えられていれば、コミュニケーションは可能となるかといえば、そうではない。どうしてか。

単なるむだ話というなら、別であるが、きちんと情報を伝え、一定の意図をもって話し合いに応ずるということであれば、まず必要となってくるのは、どのように話を組み立てるかということであろう。

すなわち、話をどう切り出すか、ということから考えてゆか

なければならない。音楽の場合なら、イントロである。やぶから棒に、結論的な部分をまくし立てても、分かってはもらえないであろうし、第一、失礼である。もっというなら、礼を失することなく、相手に不快感を与えることなく、できるだけいねいなことば遣いで相手に接するのが、コミュニケーションのいろはである。

話の組み立てということにもどっていうなら、どこで話の転換を促し、どこで、どのように、話しをまとめ、切り上げるかなど、みんな一定の作法がある。いってみれば、談話の交通整理に用いられる信号の体系である。これらは、ひっくるめて、談話標識 (**discourse marker**) の名で呼ばれる。この中には、話し手と聞き手とが、互いに相手のいうことを正確に理解しているかチェックするために必要な表現なども、当然、含まれることになる。

一般に、ことばによるやり取りは、あまりにも正確で決定的な表現ばかり用いると、一見、立派そうに見えるが、相手に思いもかけず威圧感を与えたり、自分自身を動きのとれない窮地に追い込んでしまうという危険をはらんでいる。このような危険は日本語におけるよりも英語におけるほうがずっと大きいように思われる。

このことは、言質を取られることなく、のらりくらりと答弁を繰り返すことが可能な国会と、英語を用いる外交交渉ではたちまち言質を取られ、にっちもさっちもゆかなくなることの多い現実接するだけでも明らかであろう。

英語には、ぼかし表現と呼んでよい表現が、思いのほか多く、用いられている。これには言質を取られないための用心という面もあるが、同時に、無用の揚げ足取りを避け、なだらかな

コミュニケーションを可能にする潤滑油としての働きもあるという点を見逃してはならない。英語の最上級表現は、その前に、**one of** を付して用いられることが多いが、これなどもぼかし表現の一つとみることができるであろう。**the longest river in the world** と言い切ってしまうと、動きがとれなくなるおそれがあるが、**one of the longest rivers in the world** なら、ナイル川でも、アマゾン川でも、異を唱えられる余地はなくなる。

次の (1) はどうであろうか。

(1) A: “What time are you arriving?”

(いつお着きになりますか)

B: “It will probably be around six or six thirty.”

(ほぼ 6 時、いや 6 時半といったところかな)

この場合、(1B) の **probably** と **around** が効いている。使えそうで、なかなか使えないと思われる。この場合、(1B) が、**At six.** と答えていたとしたら、別に差し支えはないものの、話し手も、聞き手も、ずっと約束した時間にしばられることになる。

簡単な質問でも、あまりにも単刀直入に聞きたいことだけを相手にぶつけるといった言い方をすると、極めてぶしつけな、礼儀知らずの言い方となる。

イギリスで「トイレはどこですか」と尋ねようとして、次の (2) を用いたとしてみよう。

(2) a. Where is the toilet?

b. Could you tell me where the nearest toilet is?

この場合、どちらを用いても、こちらの意図を伝えることは可能であっても、(2a)は、やや、つつけんどんであり、「すみません、いちばん近いトイレ、どこでしょうか」といった感じの(2b)に類する表現を用いるのが好ましい。あまりにも直接的で礼を失した質問を和らげるためのクッションの働きをしているのが、**Can I ask?** とか **Could you tell me?** などのような前置きの緩衝的表現である。

ぶっきらぼうな言い方はできるだけこれを避けなければならない。これは英語の、いわば切れっぱしにまで当てはまる鉄則である。例えば、**Yes-No** 疑問文の場合、その答えは、理屈から言えば、**Yes.** あるいは **No.** と答えれば十分なはずである。が、実際の場面でその答えが **Yes.** か **No.** だけで終わってしまうことは、まず、ない。修飾要素などを添え、**Yes, certainly.** とか、**Yes, definitely.** とか、**No, I don't think so.** とか、**No, I'm afraid not.** などと言う。形は **Yes-No** 疑問文であっても、答えが必ず **Yes.** か **No.** になるという保証はない。

次の(3)をみることにしよう。

(3) **A: Do you live in Bristol?**

B: Well, I live near Bristol.

この場合、質問を受けた(3B)は **Yes.** では答えられない。かといって、**No.** でも答えたくない。が、(3A)の質問者は **Yes.** か **No.** を求めている。こういう(3A)の質問のほこ先をひとまずかわす役目を果たしているのが、**Well** である。そうしておいてから、**near Bristol** という正しい答えを提供しているのである。

相手のほこ先をそらすのに用いられるとした **well** は数ある談話標識の中で最も多用されるものの1つであり、困ったときにはいつでも頼りにすることができる便利な語である。

話の流れを変えたいというようなときにも、**Well** と言って切り出すことができるが、そういう場合、**well** と並んで重宝するのが **anyway** である。特に長電話をぼつぼつおしまいにしたいと思っているような場合、**anyway** は便利である。これに対応する決まった日本語表現は欠落していると思われるので、いっそう、その感を深くする。

ぶっきらぼうな印象を与えまいとする心配りは、極めてありふれた謝意の表現、例えば **Thank you.** などの場合にもみられる。最も簡単な縮約形 [ŋkjú] (**Thank you**) の場合は、もちろん、別である。この形は職業的に列をなしている人々と順に握手をする人の場合、あるいは先生が学生から順繰りにレポートを受け取るような場合にみられる。

こういう特別な場合を除くと、**Thank you.** と言うだけで謝意を表すという行為が完結することは、むしろ、まれである。いうまでもなく、**Thank you.** というのは、代表的な言語行為の一つである。口で **Thank you.** と言えば、それがそのまま、感謝行為の一部を形作っているのである。だからこそ、それに伴う音調や身振りにもそれなりの配慮が求められることになるのである。では、どうするか。

ぶっきらぼうを避ける最も簡単な方法は、後に **very much** を加え、**Thank you very much.** とすることである。**Thank you.** を繰り返し、**Thank you. Thank you.** と言うのもよい。**Thanks a lot.** でもよいはずである。どこが、どう、違うのか。

ここでものをいっているのは、韻律性の存在であるといって

よいように思われる。弱強あるいは強弱という詩脚が2つそろっていけばよいが、1つでは、なにかしら欠けたところがあるといった非充足感が残るように思われる。そうしてみると、英語にはこの条件を満たしている決まり文句や金言的表現が極めて多いことに、むしろ驚くであろう。

ぶっきらぼうになりそうなことを、いわば真綿に包んだ形で提示するという心配りもコミュニケーション全体を支えている大原則であるといつてよい。

以下、コミュニケーションの現場において、どのような配慮が求められているかということを示している例をみておくことにしよう。まずは、次の(4)である。

- (4) a. Please help me write a research proposal.
(研究提案書、書くの、手伝ってください)
- b. I've been wondering if I could ask you to help me write a research proposal.
(研究提案書、書くの、手伝ってもらえるかしら、と思っていたんですが)

この場合、依頼の意図は(4a)でも伝えられるが、おだやかで、なだらかなコミュニケーションということになると、(4b)に遠く及ばない。

次の(5)は、保険の外交員のような立場にいる人のことばである。

- (5) a. Please tell me the date of your birth.
(生年月日は?)
- b. Could I ask your date of birth?

(生年月日、うかがって、よろしいですか?)

- c. Sorry to bother you, could you tell me the date of your birth?
(おそれいりますが、生年月日、うかがって、よろしいですか?)

この場合も、(5c)のSorry to bother youという前置きの表現が、その場の雰囲気をごややかなものになっているか、明らかであろう。

次の(6)にみられるif節中の進行形は、相手の言ったことに念押しをし、確認をする働きをしている。

- (6) If you are saying we should do all the thing, it would take six months.
(全部を我々だけでやるとおっしゃるのでしたら、6ヶ月はかかりますよ)

コミュニケーションを支障なく進めるためには、話し手と聞き手とが互いに相手の言ったことを確認し、自分の了解したことを相手に合図しながら進んでゆくようにしなければならない。

このような確認を取り交わすための表現を次の(7)に挙げてみることにしよう。

- (7) a. You know what I mean. (お分かりですよ)
- b. Do you know what I mean? (お分かりでしょうか?)
- c. I mean . . . (つまりですね)
- d. I know what you mean.
(おっしゃりたいこと、分かります)
- e. If you see what I mean.

(私の言わんとするところをお分かりいただければ)

f. If I may put it like this.

(こういうふうに言ってもいいんですが)

g. To put it another way. (別の言い方をしますと)

ここでもう一度、前置きの表現が加わるとコミュニケーションの流れがよどみなく導かれるようになると思われる例を、もう少し加えておくことにする。

次の(8a)はこのままの形でも特に差し支えはないと考えられるが、(8b)のようにすると、相手に対する細やかな思いやりをみてとることができ、起こりえたかもしれないわだかまりを、芽のうちに摘みとる働きをしていると考えることができるかもしれない。

(8) a. Please give me a call on the number I've just given you.

(いまお伝えした番号にお電話ください)

b. If it's OK with you, please give me a call I've just given you.

(お差し支えなかったら、いまお伝えした番号にお電話ください)

次の(9a)も、このままで用は足りるが、(9b)のほうを用いることができるなら、電話を借りるという行為によって逆に相手との心的距離を縮めるということさえ可能となるかもしれない。

(9) a. Can I use your phone? (電話お借りできますか?)

b. Would it disturb you if I use your phone?

(電話お借りしたら、ご迷惑かしら?)

以上、順不同で掲げてきた、ぼかし表現、交通整理表現、話し手と聞き手とが互いに交わす確認のための表現等々は、いうまでもなく、英文解釈のための資料ではない。コミュニケーションが行われる実際の場面において、コミュニケーション自体がなだらかに行われるのを助ける潤滑油の働きをするものである。

潤滑油だけがなめらかで、それによって動くべきはずの本体が空疎であるという場合も考えられなくはない。実際にあるとしたら、「鼻持ちならない」の一語に尽きる。が、それは主として母語話者の場合にみられる現象であろう。我々日本人の場合はどうかということ、潤滑油がその機能を果たしうるのは、それによって動かされる本体がかなり堅固に構築されている場合に限られるとあってよいであろう。TOEIC でいえば、800 点ぐらいは取れる人ということになるであろうか。

ただ、TOEIC の点数には談話標識に関するものはほとんど反映されていない。だから TOEIC という看板に含まれている **Communication** という語が泣いていると言ったのである。談話標識というのは、実際の言語運用の中においてこそ、その存在意義をもちうるもので、多肢選択式テストなどによって身につくものではない。

6 結 語

インターネットの百科事典『ウィキペディア』には、TOEIC に関する金銭がらみのスキャンダルも報ぜられているが、これに関しては言及を避ける。TOEIC に関し、我々が関心を寄

せるべき最も重大な、そして、中心的な問題は、日本でいう **TOEIC Test** の点数と、いわゆる英語の実力との相関関係であるといつてよい。つまり、**TOEIC** の点数が高ければ、それだけ英語の実力が身につけている度合いも高いといえるのかということであるけれども、残念ながら、この相関関係は成立しない。

無用のトラブルを避けるため、断っておくが、本稿は **TOEIC** が全面的に間違っているとか、**TOEIC** の点数は高いより低いほうがよいなどと、主張しようとしているものではない。本稿で筆者が主張しようとしているのは、内実が **Listening** と **Reading** の試験である **TOEIC Test** の得点そのまま英語によるコミュニケーション能力に対応するものではないということ、あるいは **TOEIC** の得点そのままその人の身につけている総合的な英語力を示しているものではないということである。

このことを証明するのは簡単である。まず、最適の被験者に御登場を願う。やや引きこもりがちの、ただし **TOEIC** 最高得点に異常な執念を燃やしているという人がよい。念願かなって満点を2度も3度も取ったとする。なんとか工夫してこの人を外交交渉や商社間の交渉の現場に立たせてみていただく。結果は待つことにしてもよいが、想像するだけでもよい。

問題は、結果がよくなかった場合、どうするか、ということになるであろう。その際、最も大きな、避けて通ることのできない問題は、コミュニケーションに関するものとなるであろう。**TOEIC** が、その看板に、コミュニケーションを掲げているのなら別であるが、掲げているが、また、**SW** テストというテストが付加されているとはいえ、十分な手当が施されて

いるとは言い難い状況にあるのだから、このことに関する限り、その責任を逃れることはできないであろう。

ただ、いつてみれば、コミュニケーションをどうするといったところで、それは、所詮、**TOEIC** 内部の問題であるにすぎない。**TOEIC** の関係者たちが気のすむように処理すればよいだけのことである。真に憂慮すべきは、**TOEIC** を利用している我々の側にある。まず我々は、**TOEIC** の得点が、そのまま、その人の身につけている英語力を表しているものではないことを、率直に認めなければならない。**TOEIC** の得点が、そのまま、その人の身につけている英語力の指標であると考えるところに、この問題をめぐる諸悪の根源があるからだ。この点が十分に認識されるなら、入社試験、各種採用試験、さらには昇進の条件などに **TOEIC** の得点が用いられるということは、なくなるであろう。すでに脱 **TOEIC** 化が始まっているという韓国の状況も十分に考慮されてしかるべきである。**TOEIC** がなくなれば、日本の英語教育は進歩向上するかというと、もちろん、そんなことはない。テストに関していうなら、官民協力して、**TOEIC** 等にとって代わるべき、日本人による日本人のためのテストを作成すべきであろう。

いうまでもないことながら、英語力はテストによって身につくようになるものではない。テストは、身についた英語力を確認するための手段であるにすぎない。立派なテストができあがっても、英語力は昔のままというのでは、お話にならないが、その「お話にならない状態」は、残念ながら、当分、変わることなく続くことになるであろう。英語という言葉は、みかけより、ずっと難しい言語であるからだ。

(東北大学名誉教授)